

「好きなことを仕事にする」ことの変遷 ——『好きを仕事にする本』を事例に——

久木元真吾

【要旨】

本稿は、「自分の好きなことを仕事選びに際して重視すること」が、約20年の間にどのように語られ、位置づけられてきたのか、そしてその位置づけがどのような変遷をみせたのかを、『好きを仕事にする本』という雑誌を対象にして検討する。

1998年の創刊当初、「好きなことを仕事にすること」はあこがれの仕事への「転身」として描かれていた。しかし2001年以降は、「私らしさ」が重視されるとともに、具体的な仕事への「転職」として選択の現実性が強調されるようになっていった。2008年からは長く続けられることの強調が加わり、2010年以降は十分な収入が得られることも重視されるようになっていった。20年を経て、「好きなことを仕事にすること」は仕事の選択に際して最も重視される条件から、重要な諸条件の中の一つという位置づけになっていった。

ただし「好きを仕事にすること」は重視されなくなったわけではなく、不可欠な要素の一つという地位を得るに至ったといえよう。言い換えれば、好きなことを自分らしく、でも十分な収入を伴って確実に続けられるというように、複数の条件を満たす仕事こそが求められているのであり、すべてが満たされてこそ、「好きなこと」を仕事にすることは現実的な選択肢として像を結ぶようになったのである。

キーワード：仕事、好きなこと、『好きを仕事にする本』

1. 「好きなことを仕事にする」への着眼¹

若者が仕事を選択するときに「やりたいこと」がキーワードとなっていることが論じられるようになって久しい²。表現はさまざまだが、自分自身の関心や好みを仕事の選択の基準ないし参照軸とすることは、肯定・否定・推奨・批判などさまざまな形をとりながら、現在に至るまで日本社会において繰り返し語られてきたといえるだろう。この点について、本稿では「自分の好きなことを仕事選びに際して重視すること」が、約20年の間にどのように語られ、位置づけられてきたのか、そしてその位置づけがどのような変遷をみせたのかを、ある雑誌を対象にして検討することを試みる。特定の時点ではなく、時間の経過に伴う変化をとらえようとす

¹ 本稿は学会発表（久木元真吾「『好きなことを仕事にする』ことの変遷」第88回日本社会学会大会一般研究報告，2015年9月19日）をもとにして新たに執筆されたものである。

² 「やりたいこと」を論点とする研究は多数あるが、例えば久木元（2003）、下村（2002）、寺崎（2006）、鶴飼（2007）、山口（2012）、妹尾（2015, 2023）などがある。

る際には、特定のものに注目してその推移と変遷を追うことが有効な視点だと考えられることから、こうしたアプローチを選ぶことにする。

本稿で具体的に分析の対象とするのはある特定の雑誌であり、その雑誌の、「自分の好きなことを仕事選びに際して重視すること」に関する企画・記事、そこで用いられている言葉やフレーズについて分析を行う。その雑誌は、20代後半～30代の女性を対象とする、習い事やスキル習得などのスクール情報誌『ケイコとマナブ』（リクルート、1990年～2016年）の臨時増刊として、1998年から年数回のペースで刊行が始まった『好きを仕事にする本』（1998年～2008年）である。これはタイトルが明確に示している通り、まさに「自分の好きなことを仕事選びに際して重視すること」を全面に押し出した典型的な事例であり、本稿の問題意識のもとで検討されるべき対象であるといえる。なお『好きを仕事にする本』と題されてはいるものの、これはあくまでも『ケイコとマナブ』の臨時増刊として一定頻度で定期的に刊行されたものであって、「本」ではなく雑誌である。

ただしこの『好きを仕事にする本』は、後述するように2008年にリニューアルされ『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』となり、さらに2010年からは元の雑誌の『ケイコとマナブ』で定期的に「好きなことを仕事にする」をテーマにした特集が組まれる形に変わった。しかし形態は変わりながらも、いずれも『ケイコとマナブ』の本誌または臨時増刊であることは変わらず、また「好きなことを仕事にする」というコンセプトや企画は継続されていることから、これらを一貫したものとして変遷をみることができると考えられる³。

2. 『好きを仕事にする本』

まず、分析の対象である雑誌について詳述することにしよう。

1960年代から就職情報誌を発行していたリクルート社が、習い事やスキル習得などのスクールの情報を集めた雑誌『ケイコとマナブ』を創刊したのは1990年であった。『ケイコとマナブ』の創刊号の表紙には「自分に欲ばりな人のスクール情報マガジン」「脱・勉強宣言」とあり、フォーマルな学校教育での学びではない、自分の興味に沿って学ぶことが強調されている。タイトルの「ケイコとマナブ」は言うまでもなく、「お稽古ごと」からの「ケイコ」と「学ぶこと」からの「マナブ」を女性名・男性名になぞらえる形でつけられたものであり、「ケイコ」が前にあるとはいえ男女双方の名前が並列されているように、創刊号の時点では必ずしも女性向けの雑誌というわけではなかった。またその内容も、後の号に比べて独自の記事の比重が大きかったのであった。しかしその後はより明確に「スクール情報マガジン」という性格を強め、誌面の多くをスクールの情報が占めるようになっていき、読者ターゲットも女性にシフトしていった。

そうした中、1998年9月に『ケイコとマナブ』の臨時増刊号として刊行されたのが『好きを仕事にする本』である。表紙には「やりたい仕事につくためのスキルの身につけ方・なり方完全ガイド」と記され、その内容の中心は「夢をかなえた女性148人の転身ストーリー：『好き』を仕事にした方法を徹底インタビュー」という、女性へのインタビューとその女性が学んだス

³ 参照した雑誌のうち、2003年6月刊行号以降のすべての号は筆者が所有しているものを用いたが、それ以前のは国立国会図書館で閲覧したものが含まれる。また、2015年に横山幸代氏（当時リクルートマーケティングパートナーズ）のご協力でバックナンバーの一部を閲覧することができた。なお1999年3月刊行号のみは、国会図書館等にも所蔵がないため閲覧できていない。

クルの情報が合わせて紹介されているページである。巻末には各スクールへの資料請求はがきがついている。それ以外に、巻頭などにより詳しいインタビューや、「語学ができると働き方はこんなに広がる!」「女性のためのツカえる資格69」などの記事が配されているが、雑誌全体の中心はスクールの情報である。本誌『ケイコとマナブ』が当時まだ「お稽古ごと」に近い要素も重視していたのに対して、『好きを仕事にする本』はより明確に「仕事」にフォーカスしており、スクールで身につけるスキルや知識をそのまま仕事にしていくことが志向されている点が特徴であった。以下で述べるように雑誌としては変遷があるが、こうした情報誌としての形態は本稿で考察するすべての雑誌に関して共通する特徴である。

『好きを仕事にする本』は、その後も約10年にわたり『ケイコとマナブ』の臨時増刊として年2～4回のペースで刊行されていった⁴。しかし2008年の夏号刊行後にリニューアルが行われ、「好きを仕事にする本」を副題として残しつつ、『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』というタイトルに変更され、年2回の刊行に変わった。ただしこの形での刊行は2号だけにとどまり、臨時増刊としての刊行はここで終了する。約1年を経た⁵2010年に、本誌『ケイコとマナブ』が3月号で「「好き」を「仕事」に変える方法」という特集を掲載し、これ以降6年間にわたり年2回のペースで定期的に「好きなことを仕事にする」をテーマにした特集が組まれるという形になった。最後となったのは2016年3月号の特集「人生は一度きり。“好き”なら踏み出せ!好きを仕事にしたい人、応援号!」で、その後2016年6月号で『ケイコとマナブ』は休刊となった。並行して2004年から開設されていた、スクール情報を提供する「学びの総合サイト」である「ケイコとマナブ.net」に一本化するという理由での休刊であった⁶が、これにより「好きなことを仕事にする」というコンセプトが具体的に表現されることはなくなってしまった。なおこの「ケイコとマナブ.net」も、2020年1月31日でサービスを終了している⁷。

以上のように、1998年から刊行された『好きを仕事にする本』は、雑誌としては2度の変化を経ているが、2016年の最後の特集号まで「好きなことを仕事にする」という中核のコンセプトは継続されており、雑誌としての形態や内容もおおむね変わっていない⁸。したがってこ

⁴ 以下、『好きを仕事にする本』については、『ケイコとマナブ』の何月号の臨時増刊なのかを号数表記として示している。例えば『ケイコとマナブ』2003年6月号の臨時増刊として刊行された『好きを仕事にする本』の場合は、『好きを仕事にする本』の「2003年6月刊行号」として表している。

⁵ 2009年2月に2号目の『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』が刊行された後、2009年に別の臨時増刊『ケイコとマナブ Precious Time』が2号刊行されている。しかしこれは主婦を対象とした「家庭を持つ女性のためのレッスン発見マガジン」というもので、本稿の主題とコンセプトが異なるため検討の対象とはしていない。リクルートの2009年1月26日のプレスリリース「家庭を持つ女性のためのレッスン発見マガジン『ケイコとマナブ Precious Life』発刊!」を参照 (https://oldrelease.recruit-holdings.co.jp/news_data/release/2009/0126_1812 2023年9月25日確認)。

⁶ リクルートライフスタイルの2016年1月12日のプレスリリース「スクール情報誌『ケイコとマナブ』を休刊し、学びの総合サイト『ケイコとマナブ.net』へメディアを一本化」を参照 (https://www.recruit.co.jp/newsroom/recruit-lifestyle/news/education/nw15342_20160112/ 2023年9月25日確認)。

⁷ リクルートマーケティングパートナーズの2019年7月3日のプレスリリース「『ケイコとマナブ』サービス提供終了のお知らせ」を参照 (https://www.recruit-mp.co.jp/news/release/2019/0703_3750.html 2023年9月25日確認)。

⁸ 『ケイコとマナブ』には1993年創刊の関西版など地域別の版があり、掲載されるスクール情報の内容が地域に即したのようになっていたが、本稿で考察する「好きなことを仕事にする」というコンセプトやその表現、スクール情報を含まない記事に関しては、地域別の版によらず共通のものが掲載されていた。

れらをまとめて一貫した形でその変遷をみることができるものと考え、1998年から2016年までに刊行された雑誌群を分析の対象とする。実際、「好きなことを仕事にする」というコンセプトの一貫性はあるものの、スクール情報以外の記事や、用いられているフレーズなどから、さまざまな変化を確認することができる。以下では時系列でそのことを追っていくことにしよう。

分析の対象とする1998年からの『好きを仕事にする本』から2016年の『ケイコとマナブ』に至るまでの共通点として、「自分の好きなことを仕事にしたい女性向けの、そのために通うスクールの情報を提供する雑誌」であることをあらかじめ確認しておこう。『好きを仕事にする本』は最初から一貫して女性向けであり、その後も『ケイコとマナブ』まで含めて女性を読者として想定するものであった。読者の年齢は時期による重点の違いはあるものの、おおむね20代半ば～30代前半が中心といえる。誌面構成の3分の2から8割はスクールの情報であり、2割から3分の1が記事部分にあたり、巻末に資料請求のしがきがついているというのも、全期間にわたり共通している点である。

以上で説明した、具体的な分析の対象となる雑誌のリストは表1にまとめている。

表1 『好きを仕事にする本』および『ケイコとマナブ』の関連特集号・一覧

刊行年月	誌名	特集／見出し
1998年9月	好きを仕事にする本	夢をかなえた女性148人の転身ストーリー
1999年3月	好きを仕事にする本	(国会図書館等に所蔵なし)
1999年9月	好きを仕事にする本	今こそ英語を学ぼう！
1999年11月	好きを仕事にする本	女性162人の転身ストーリー
2000年3月	好きを仕事にする本	女性244人のやりたい仕事、手に入れた！
2000年6月	好きを仕事にする本	クリエイターをめざせ！
2000年9月	好きを仕事にする本	絶対かなえる！私の転身！
2000年12月	好きを仕事にする本	女性のための独立・開業
2001年3月	好きを仕事にする本	春から転身！完全準備ガイド
2001年6月	好きを仕事にする本	学べば手に入る！やりたい仕事
2001年10月	好きを仕事にする本	「好き♥」から探す憧れ仕事・全250職種
2001年12月	好きを仕事にする本	[好きなコト]と[働き方]で見つける私の仕事
2002年3月	好きを仕事にする本	今からめざそう♥私がハッピーになる仕事
2002年6月	好きを仕事にする本	人気のお仕事×働き方大百科
2002年9月	好きを仕事にする本	私が天職を手に入れた瞬間
2002年12月	好きを仕事にする本	学んでめぐり逢った私の天職
2003年2月	好きを仕事にする本	春、恋する仕事に出会いたい
2003年6月	好きを仕事にする本	好きな仕事と働き方を手に入れる方法
2003年9月	好きを仕事にする本	「好き♥」から探す憧れ仕事146職種
2003年12月	好きを仕事にする本	好き♥から探す憧れ仕事・全131職種
2004年2月	好きを仕事にする本	好き♥から探す憧れ仕事156職種
2004年5月	好きを仕事にする本	好き♥から探す憧れ仕事全112職種
2004年8月	好きを仕事にする本	“これ好きかも…”から始まった175人のシアワセ転職ストーリー
2004年11月	好きを仕事にする本	「毎日楽しい★」を手に入れた133人の転職スタイル
2005年3月	好きを仕事にする本	見つけた！新しいワタシ163人の就職スタイル

刊行年月	誌名	特集／見出し
2005年5月	好きを仕事にする本	仕事って楽しい！を実現した102人の転職スタイル
2005年8月	好きを仕事にする本	新しいワタシ★を手に入れた！148人の転職スタイル
2005年11月	好きを仕事にする本	私だからできることを見つけた★120人の転職スタイル
2006年3月	好きを仕事にする本	今よりもっと、楽しい毎日手に入れた★151人の転職スタイル
2006年6月	好きを仕事にする本	未経験からでもなれた！98人のHappy転職スタイル
2006年8月	好きを仕事にする本	今がすごく楽しい！126人のワタシらしい転職
2006年12月	好きを仕事にする本	25歳から目指せる人気のお仕事128
2007年3月	好きを仕事にする本	25歳からの目指し方完全ガイド
2007年6月	好きを仕事にする本	「明日も楽しみ！」になった86人の転身ストーリー
2007年9月	好きを仕事にする本	もっと自分を好きになる 仕事を変えたら毎日がキラキラ
2007年12月	好きを仕事にする本	転職する？しない？25歳賢い女の選択！
2008年3月	好きを仕事にする本	夢を叶える★パーフェクトバイブル
2008年6月	好きを仕事にする本	25歳だから見つかるアナタの才能！
2008年下半期	好きを仕事にする本：ワタシにずっと心地いいお仕事	101人のハッピー転身スタイル
2009年上半期	好きを仕事にする本：ワタシにずっと心地いいお仕事	88人のハッピー転身スタイル・「後悔しない転身」の見極め方
2010年3月	ケイコとマナブ	「好き」を「仕事」に変える方法
2010年9月	ケイコとマナブ	30代以降の“幸せ度”が変わる！「好き」を「仕事」にする方法
2011年3月	ケイコとマナブ	27歳から「好き」を「仕事」に変える！
2011年9月	ケイコとマナブ	稼ぐための黄金ルール付き 「好き」を「仕事」にする方法
2012年3月	ケイコとマナブ	“好き”が“仕事”になる！HAPPY転身ガイド
2012年10月	ケイコとマナブ	ワタシらしく、HAPPYに！「好き」を「仕事」にする方法
2013年3月	ケイコとマナブ	「好き」を「仕事」にする方法 27歳からのスタートBOOK
2013年9月	ケイコとマナブ	将来の保険になる「好き」を「仕事」にする働き方
2014年3月	ケイコとマナブ	28歳からのストレスフリーで働ける「好き」を「仕事」にする選択
2014年9月	ケイコとマナブ	「好き」な「仕事」で長く・自分らしく・堅実にちゃんと稼ぐ方法
2015年3月	ケイコとマナブ	オンナがずっと恋したくなる仕事 30代女子、これを最後の転職にしたい
2015年9月	ケイコとマナブ	「好き」を仕事にして年収350万円以上稼げる5つの方法
2016年3月	ケイコとマナブ	人生は一度きり。“好き”なら踏み出せ！好きを仕事にしたい人、応援号！

3. 1998年～2000年——「転身」のガイド

1998年9月刊行の最初の号から2000年6月刊行号までの『好きを仕事にする本』は、表紙や目次に「やりたい仕事につくためのスキルの身につけ方・なり方完全ガイド」と記載されている。「[「やりたい仕事」への近づき方]（1999年11月刊行号，p.15）、[「女性244人の「やりたい仕事、手に入れた！」]（2000年3月刊行号，p.97）など、「やりたい仕事」という表現が用いられる箇所は他にもみられる。久木元（2003）で分析した、「やりたいこと」がキーワード

として語られることを最初期に指摘した調査である日本労働研究機構のフリーター調査（日本労働研究機構 2000）は 1999 年の実施であり、この時期の『好きを仕事にする本』で「やりたい仕事」という言葉が選択されているのはそのことと響き合うものがある。ただし、ここでは漠然とした「やりたいこと」ではなく「やりたい仕事」であり、具体的な仕事が想定されている表現である点に注意が必要である。スクールで学ぶことを経由するイメージであるため、一定の具体性があることが背景にあるといえる。

そして、スクールでの学びなどを通じて「やりたい仕事」に到達することは、しばしば「転身」と表現される。「夢をかなえた女性 148 人の転身ストーリー」（1998 年 9 月刊行号, p.16）、「絶対かなえる！私の転身！」（2000 年 9 月刊行号, p.17）などが例であるが、単に「転職」することではなく「天職」にたどりつくという含意が込められているため、「転身」という表現が用いられていると考えられる。また、「天職を手に入れた彼女たちのサクセスストーリー みんな最初は OL だった」（1998 年 9 月刊行号, p.4）というように、「OL」から「天職」「やりたい仕事」への変化を表現するなら「転職」よりも「転身」の方がドラマティックな変化を伝えるからでもあるだろう。この「転身」という表現は、頻度は変わるものの 2010 年代に至るまで用いられ続けるものであり、「好きを仕事にする」というコンセプトを体現する語彙の一つであるといえる。

国立社会保障・人口問題研究所の出生動向基本調査⁹では、未婚の女性に対して「理想と考えるライフコース」「実際になりそうな予定のライフコース」についての質問を継続的に実施している。1997 年と 2002 年の調査では、理想のライフコースとして最も選ばれたのは「再就職コース」（結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ）で 1997 年 34.3%・2002 年 36.7%、二番目に多かったのは「両立コース」（結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける）で 1997 年 27.2%・2002 年 27.3%であった（表 2）。なお表 2 の記載分よりも前の年の調査結果では、「専業主婦コース」が最多であった。そして予定のライフコースでは、1997 年と 2002 年のどちらも「再就職コース」が最も多かったが（42.9%、41.8%）、1997 年は二番目に多かった「専業主婦コース」（結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない）が減少し、2002 年には「両立コース」が上回って二番目になっている（表 3）。つまりこの時期は、専業主婦というあり方が理想としても予定としてもそれ以前ほどは選ばれなくなっていく過程の時期にあたる。このことをふまえると、この時期は結婚・出産後にまったく仕事をしない人生ではない生き方を多くの未婚女性が展望するようになった時期だといえる。他方で上述の「OL」はおそらく結婚後に退職することを前提とした働き方が多かったとするなら、そこで「やりたい仕事」をやること、それに「転身」することが期待をもって思い描かれることは十分にありえたと考えられる。ただし、そこで「転身」とまで表現されるほどであったということは、現在の自分自身とそこまで地続きではないような「憧れ」の対象であるという面も強かった可能性もあるだろう。

⁹ 各回の出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）の報告書は国立社会保障・人口問題研究所のウェブサイトで公開されており、以下で引用する調査結果のデータも各回の報告書を参照している（https://www.ipss.go.jp/site-ad/index_Japanese/shussho-index.html 2023 年 9 月 25 日確認）。

表2 未婚女性の理想のライフコース（%、出生動向基本調査）

調査年	専業主婦コース	再就職コース	両立コース	DINKSコース	非婚就業コース	その他・不詳	調査客体数
1997	20.6	34.3	27.2	4.4	4.4	9.2	3982
2002	18.5	36.7	27.3	4.0	5.3	8.2	3897
2005	18.9	33.3	30.2	4.1	5.1	8.4	3139
2010	19.7	35.2	30.6	3.3	4.9	6.3	3667
2015	18.2	34.6	32.3	4.1	5.8	5.0	2570

※対象は18～34歳の未婚女性

※各ライフコースの説明は以下の通り

専業主婦コース = 結婚子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない

再就職コース = 結婚子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ

両立コース = 結婚子どもを持つが、仕事も一生続ける

DINKSコース = 結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける

非婚就業コース = 結婚せず、仕事を一生続ける

表3 未婚女性の予定のライフコース（%、出生動向基本調査）

調査年	専業主婦コース	再就職コース	両立コース	DINKSコース	非婚就業コース	その他・不詳	調査客体数
1997	17.7	42.9	15.5	3.0	9.3	11.6	3982
2002	13.6	41.8	17.5	4.0	12.5	10.6	3897
2005	11.7	37.1	20.8	3.2	15.6	11.7	3139
2010	9.1	36.1	24.7	2.9	17.7	9.5	3667
2015	7.5	31.9	28.2	3.8	21.0	7.6	2570

※対象と各ライフコースの内容は表2と同じ

4. 2001～2008年——「私らしさ」という観点の登場

2001年以降、『好きを仕事にする本』で注目されるのは、それまでは顕著でなかった「私らしさ」への言及が登場することである。2001年3月刊行号には「適職探しの自己分析とカウンセリング」という記事が掲載されているが（p.20）、それまでの号では「やりたい仕事」の具体性がある程度前提とされていたのに対して、はじめてその点が不明確な読者が想定されるようになり、またそれを明確化するために自己分析を行うという回路が導入されており、注目される。この2001年は、その次の2001年6月刊行号では「「好き」と「働きたか」から見つける私にピッタリの仕事!!」（p.5）、2001年10月刊行号では「「好き」「得意」から探そう！私にピッタリ♥の仕事」（p.16）、2001年12月刊行号では「学んで手に入れた！私らしい「仕事」と「働き方」」（p.3）というように、他の人ではなく「私」自身にフィットする仕事、「私らしい」仕事という含意の表現が多用されるようになっていく。めざされる望ましい状態の表現に「自己と仕事の連関」が明確に導入されていくのである。これも別稿（久木元2003）で検討したフリーターたちの「やりたいこと」の語りと共通するタイミングと内容であるといえるだろう。

その後も、「好きなことを仕事にすること」を「私らしさ」との関連で表現する言葉は継続

的にみることができる。例えば、「仕事を変えて、一番好きな私になろう」(2002年12月刊行号、表紙)、「見つけた！新しいワタシ163人の就職スタイル」(2005年3月刊行号、表紙)、「私だからできることを見つけた★120人の転職スタイル」(2005年11月刊行号、p.27)、「今がすごく楽しい！126人のワタシらしい転職」(2006年8月刊行号、p.27)、「もっと自分を好きになる 仕事を変えたら毎日がキラキラ」(2007年9月刊行号、表紙)などである。後述するこの後の時期の展開を考えると、最もストレートかつ躊躇なく単独で「好きなことを仕事にすること」が肯定され推奨されたのがこの時期であるといえよう。

この時期のもう一つの特徴は、「転身」という表現は引き続きあるものの、それ以上に「転職」という言葉が全面的に用いられていることである。2000年までの『好きを仕事にする本』が、現在の状況から大きく変わる「転身」を強調していたのに対して、この時期はシンプルに別の仕事に変わる「転職」と表現することが一般化する。特に2004年8月刊行号以降はそれが顕著であり、それまで「憧れ仕事」などと表現されていたものが単に「転職」と表現されるようになり、表紙に大きな字体で「転職」と記されるようになる。このことが表しているのは、前の時期までは現在と将来の「転身」の間に大きな飛躍があるというイメージだったのが、この時期からは「転職」、すなわち現在の仕事から別の仕事に移るということであり、現在と将来の間にそこまで大きなギャップがあるわけではないという含意である。もちろん転職した後は「仕事って楽しい！を実現」(2005年5月刊行号、p.28)、「今よりもっと、楽しい毎日手に入れた★」(2006年3月刊行号、p.33)というように十分大きな変化が想定されているともいえるが、客観的な環境の変化以上に主観的な満足度の増大が強調されているともいえる。「転身」に比べてそれだけ日常的・現実的なものになっているといえることができるだろう。その意味で、この時期の『好きを仕事にする本』はいわば「転職成功例のカタログ化」が進展したといえよう。

以上のことは、「好きなことを仕事にすること」がそれなりに実現可能性のある現実的な選択をめぐる問題として理解されるようになったということでもあるが、そのことが具体的に表れているのが年齢の登場という点である。2006年12月刊行号の「25歳から目指せる人気のお仕事128」(2006年12月刊行号)は、記事の大きい見出しのレベルで初めて年齢が出てきた例である¹⁰。これ以降、「25歳からの目指し方完全ガイド」(2007年3月刊行号、表紙)、「転職する？しない？“私スタイル”で明るい未来を手に入れる 25歳 賢い女の選択！」(2007年12月刊行号、pp.12-13)、「25歳だから見つかるアナタの才能！」(2008年6月刊行号、pp.12-13)など、「25歳」が繰り返し登場するようになる。この「25歳」は、これらの記事の中では次のような形で言及されている。「結婚や出産が、今まで以上に現実味を帯びてくる25歳というお年頃。職場でも、もう新人ではないけれど、まだベテランとはいえない微妙な時期です」(2007年12月刊行号、p.12)「自分自身を振り返るゆとりが出てくるのは、だいたい25歳前後。……この時期こそが、“好き”を見つけるチャンスなんです」(2008年6月刊行号、p.12)。25歳は、現実的に将来を考えたり自分のキャリアを見直す時期としてクローズアップされているのである。

表4は女性の平均初婚年齢の推移を表にしたものである。これをみると、女性の平均初婚年

¹⁰ 2002年3月刊行号および6月刊行号には「25歳・未経験からの転職・転身完全ガイド」と、2002年12月刊行号では「25歳から憧れの仕事を手に入れるノウハウ満載！」というフレーズが表紙に掲載されていたが、いずれも比較的小さな字で記されたものであり、具体的な掲載記事に対応するものではなかった。

年齢がちょうど26歳から27歳になるのに1992年から2000年までの8年間を要していたが、27歳から28歳になるには2000年から2005年までの5年間だけであり、さらに28歳から29歳になるのは2005年から2011年の6年間である。つまり、1990年代に比べて2000年代は女性の平均初婚年齢の上昇が加速した時期であるといえる。そして、『好きを仕事にする本』で「25歳」が繰り返し登場するようになったのはこの時期にあたる。『好きを仕事にする本』が創刊された1998年の平均初婚年齢は26.7歳であり、あくまで平均ではあるが、結婚は25歳の女性にとって1年半ほどで起こり得る出来事であった。しかし「25歳」が繰り返し登場するようになった時期の平均初婚年齢は28.2～28.5歳であり、25歳の女性からみても3年以上の時間がある。仮に平均の通りに結婚し、結婚・出産後の離職を想定していたとしても、新しい仕事に取り組む十分な時間があるということであり、そのタイミングで転職を考えることは以前の時期に比べ現実的に検討できることになっていたといえるだろう。

そして、前節でもみた出生動向基本調査の2005年と2010年の結果をみると（表2、表3）、理想のライフコースについてはどちらの年も引き続き「再就職コース」が最も多いものの、二番目に多い「両立コース」は以前よりもさらに増えて3割に達している（2005年30.2%・2010年30.6%）。予定のライフコースについても「両立コース」はさらに増え、「専業主婦コース」はさらに減少している。こうした意識の動向を反映するように、「25歳」が初めて登場した2006年12月刊行号には、表紙に「仕事はずっと続けたい——っ!!!!」という言葉がみられる。同じ表現は次の2007年3月刊行号の表紙にもみられ、さらに次の2007年6月刊行号には「好きな仕事をずっと続ける方法」という6ページにわたる記事が掲載されており（pp.92-97）、結婚・出産・転職・介護などの生活の変化にも対応したケースの例が紹介されている。結婚や出産などのライフイベントを経験しても仕事を続けていくことへの関心が表現されるように

表4 平均初婚年齢（女性、人口動態調査）

年	年齢	年	年齢
1992	26.0	2007	28.3
1993	26.1	2008	28.5
1994	26.2	2009	28.6
1995	26.3	2010	28.8
1996	26.4	2011	29.0
1997	26.6	2012	29.2
1998	26.7	2013	29.3
1999	26.8	2014	29.4
2000	27.0	2015	29.4
2001	27.2	2016	29.4
2002	27.4	2017	29.4
2003	27.6	2018	29.4
2004	27.8	2019	29.6
2005	28.0	2020	29.4
2006	28.2	2021	29.5

※ウェブサイト「e-Stat 政府統計の総合窓口」の人口動態調査のデータによる
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00450011&tstat=000001028897>

なったことも、この時期の、特に後半における重要な特徴であるといえる。この「仕事を続けること」はこれ以降の時期においても重要な要素であり続けることになる。

他にも、2007年12月刊行号には「会社でもうちょっと頑張りたいあなたに読んでほしいフツーOLからバージョンUPできる最強資格45」という記事が掲載されている(pp.102-105)。転職の成功例が紹介されることが多い中で、資格をとるという「バージョンUP」を通じて「会社でもうちょっと頑張りたい」と考えることはやや異質であるといえよう。ただこれもまた、上述の「仕事を続けること」への関心の一つの表れであるとも考えられる。単に「好きを仕事にする」ことが実現できさえすればよいというわけではなく、「続けること」もまた重視されることが少しずつ可視化されているわけであるが、これは次の展開を予兆的に示唆するものでもあった。

5. 2008～2009年——「ずっと」の前面化

既に述べたように、『好きを仕事にする本』としての刊行は2008年6月刊行号でいったん終了になり、2008年8月に『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』として新たに刊行された。雑誌の内容としては従来の『好きを仕事にする本』を引き継いだ内容であり、副題に「好きを仕事にする本」が残っていることから、一見すると誌名を除けばそれまでの号から特別な変化はないように見える。

ただ、注目すべきはそのタイトルである。「ワタシにずっと心地いいお仕事」というのは、自分自身にとっての主観的な価値を表現しているわけだが、それが「ずっと」であることが重要な点であるといえよう。なぜなら、「ずっと」は前節の最後でふれた「仕事を続けること」への関心に明確に応える表現だからである。期間限定のものではなく、「ワタシにとっての心地よさ」が「ずっと」持続することが求められているわけであり、その「ずっと」という言葉が雑誌のタイトルにまで盛り込まれた点に、そのことが特に重視されていることが表れているといえよう。

実際、この号の表紙には「一度身につけたスキルをフル活用して、一生仕事する「好きな仕事をずっと続ける方法」という言葉があり、それに対応するものとして「40代の私が、20代のあなたたちに伝えたいこと「手に職をつける」ということ」(pp.32-35)というインタビュー記事が掲載されている。結婚・出産・育児などを経つつ、ネイリストとトラベルコーディネーターとして働く40代女性2人のインタビューであり、こうした記事を通じて、「好き」を仕事にすることは、たとえば結婚や出産までの限定された期間にできればいいことではなく、「一生」続けることが志向されていることが示されているといえよう。また同じ号の「10年後も使える資格」という記事(pp.28-31)も、同様の志向を表すものである。

このように、2008年の『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』へのリニューアルは、ただ「好き」を仕事にすること(「転身」「転職」の達成)だけではなく、それと同等に近い重みをもって「ずっと」すなわち働き続けることが前面化したことが大きな特徴である。「好き」を仕事にすることの実現可能性だけではなく、持続可能性までが視野におさまられるようになったのである。

ただし上述したように、この『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』はこの次の2009年上半期号を刊行した後、予告された次の号は刊行されないまま終わってしま

う。しかし「好きなことを仕事にする」というコンセプトは、本誌『ケイコとマナブ』で継承されていくことになる。

6. 2010～2016年(1) ——「稼げる」こと

『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』の2009年上半期号から約1年を経て、「好きなことを仕事にする」というコンセプトは本誌『ケイコとマナブ』に再登場する。創刊から20周年を迎えた『ケイコとマナブ』の2010年3月号は、「『好き』を『仕事』に変える方法」を特集テーマとするものであった。これ以降、毎年のおおむね3月号と9月号において、年2回「『好き』を仕事にする」ことを特集テーマとする号が刊行されるようになっていった。臨時増刊としての単独の刊行はなされなくなったが、本誌の定期的な特集企画として存続していったのである。『ケイコとマナブ』も形態としてはスクール情報誌であり、誌面の半分以上をスクールの情報が占めることには変わりなく、特集テーマに即した記事部分だけが毎月のオリジナルな内容となる。以下では、2010年3月号以降の『ケイコとマナブ』のうち、「『好き』を仕事にする」ことを特集テーマとする号を対象として考察を進めていく。

この時期の大きな特徴は、重視されるポイントの増加である。「好き」を仕事にすることの重視はもちろん、これまでに登場した「私らしさ」や「仕事を続けること」も引き続き重要な点として位置づけられているが、それだけにとどまらなくなっているのである。

まず「私らしさ」については、引き続き「ワタシらしく、HAPPYに!『好き』を『仕事』にする方法」(2012年10月号, pp.22-23)、「無理せず叶う! 私らしい転身スタイル」(2013年1月号, p.48)などの例はみられるものの、以前の時期ほど前面に出てくるわけではない。重視されなくなったわけではないが、真っ先に語られるものではなくなっているといえるだろう。

「仕事を続けること」については引き続き明確に重視されている。例として、2010年3月号では、表紙の「ケイコとマナブ」という題字の上に「一生モノ仕事に就く方法、教えます」というフレーズが加えられている。記事としても「保存版 一生モノお仕事★発見マップ」が掲載されており(pp.45-53)、継続への関心を表す「一生モノ」という表現が強調されていることがわかる。これ以降も、「未経験から「一生モノ」仕事に就く必勝ダンドリ」(2011年3月号, pp.34-41)、「長く働くための新提案」(2014年3月号, p.47)、「ゼロから始め、一生ときめく仕事をゲットした女子達」(2015年3月号, p.54)などのフレーズがみられる。ただこのことが特に前面化して語られるわけではなく、この時期の読者の女性たちにとって働き続けることはむしろ自明の前提となっているともいえるかもしれない。

以上の二点以外に、新たに重視されるポイントがこの時期には加わっている。それは「収入」である。もちろん以前の時期においても収入が不問だったわけではないだろうが、この時期ははっきり記されるようになったことが特徴である。用いられる表現としては、この時期に初めて登場したのが「稼ぐ」である。「好き」を仕事にすることは重要なことではあるが、ただそれだけではなく、それを通じて納得のいく収入が得られることも決して無視できない条件とみなされるようになったことを示している。具体例としては、「『好き』を『仕事』にする方法 稼ぐための黄金ルール」(2011年9月号, pp.30-31)、「『好き』×『仕事』を一生続けるために業界別「稼ぐプロ」への近道、教えます!」(2011年9月号, pp.70-73)、「“アノ資格”で、いくら稼ぐ?」(2014年9月号, 表紙)、「20代女子の平均年収より稼ぐ 「好き」を仕事

にして年収350万円以上稼げる5つの方法」(2015年9月号, pp.26-35)などであり、最後の例のように具体的な金額が出てくるものも見られるようになっている。これは女性たちが貪欲になったというより、日本社会全体の低迷する経済状況に呼応するものであるとみるべきであろう。「好き」ではない仕事であっても、確実な収入があり雇用が保障されているのなら、簡単にやめてしまって次の仕事に不安定だったり収入が大きく下がったりするリスクがあることを軽視できない中では、「好き」を仕事にしようとする場合でも「稼げる」ことはやはり重要な条件たらざるをえない。そのことが表れているといえよう¹¹。

なお、表2および表3から、この時期にあたる2010年から2015年にかけての出生動向基本調査の「理想のライフコース」「予定ライフコース」の結果を見ても、最も多い再就職コースと二番目の両立コースの差は3%未満にまで縮まっており、結婚や出産を経ても退職することなく働き続けることが完全に主要な選択肢になっていることがわかる。これは仕事を続けたいという関心のストレートな反映である面と、十分な収入を確保するためには共働きであることは必須であるという実状の反映である面の両方があると考えられる。また、予定ライフコースでの非婚就業コースが年々増加し、2015年には2割を超えていることもあわせて注目される。これらはいずれも収入が重視されることの背景であるといえるだろう。

7. 2010～2016年(2) —— 「転身」「転職」未満のあり方

また、この時期は「転身」「転職」に至らない形への言及が増加することも特徴である。現実に「好き」を仕事にする形の転職が容易にできるわけではなく、また『ケイコとマナブ』で紹介されるスクールで学んでスキルを身につける場合でも時間を要する中で、めざす「好き」の仕事があっても「転職」が実現するまでの過程は今の仕事を続けることになる。前述したように収入が重視される中で、転職しても十分に「稼げる」かどうか慎重に吟味されるようになっていよう。そうした中では、現在の状況と「好き」の仕事の間の中間的なあり方が注目されるのは自然なことだといえよう。

上の検討で2007年の「会社でもうちょっと頑張りたい」というフレーズを取り上げたが、たとえやがて「好き」を仕事にすることを考えていたとしても、当面は現在の仕事を続けるならば、そのことを前提とした記事も登場することになる。その例が、2014年3月号掲載の「人事のプロが教える「今の会社に居続ける!!」事務OLの最強★資格・スキル」である(pp.106-109)。この記事の中で「「今の会社が好きだから、ずっとここで働きたい」と思っている人は多いのではないのでしょうか」(p.106)という言葉がみられるが、「居続ける」「ずっとここで働きたい」というのは、仕事を継続するという関心にはフィットするものの、あれほど「転身」「転職」が語られてきたことを考えると正反対のようにみえるかもしれない。他にも、「26歳女子これから会社に求められるための4つの条件」(2015年9月号, pp.50-55)も、「会社に求められる」ようになる点に「転職」とは逆の志向をみることができるともいえるかもしれない。ただこれらの言葉は、将来「一生モノ仕事」にやがて移っていくとしても、それまでの間を確実に収入を維持して生

¹¹ この「年収350万円以上」と明示している2015年9月号の記事でも、「好き」を仕事にできていない人に対して「「好き」を仕事にすることに踏み切れないのはなぜ?」という質問をした調査結果を紹介する中で、「金銭的に余裕がないと無理」「収入が不安定になりそうだから」「やりたい職種の給料相場が今の仕事よりも低い」「その仕事では生活できるほどのお給料や福利厚生が得られるかわからない」といった声を取り上げている(p.26)。

きていくことが必要だからこそ語られているのであって、その意味で「好き」を仕事にしようとする事と矛盾しない現実的な判断によるものだといえる。

同様に、「転職」未満の例としてこの時期にたびたび言及されるようになったのは「副業」である。早い例としては『好きを仕事にする本』2007年12月刊行号の「自分を表現する「サイドワーク」流行ってます！」(pp.96-99)や『ワタシにずっと心地いいお仕事～好きを仕事にする本』2008年下半期号の「土日に、平日夜に、好きなことで稼ぐ！「サイドワーク」の始め方」(pp.36-39)があるが、これらはまさに「好き」を仕事にするための第一歩としてサイドワークをする女性たちを紹介するものであった。これらに対して、この時期に「副業」が取り上げられるときは、副業を通じて収入を得ることがより主題化されている点で異なっている。その最初の例は、2013年9月号の「経験ゼロから始める 副業・週末開業でプチ稼ぎ 目指せ月3万円！」という記事である(pp.12-15, 表紙)。その後も、「空いた時間でプチ稼ぎ ゼロから始める女子のための副業入門」(2014年3月号, pp.12-15)、「副業で月8万円稼ぐためにやるべきこと」(2014年9月号, 表紙)、「目指せ！月3万円 自分に合ったスタイルを見つけよう 副業の始め方」(2015年3月号, pp.10-13)というように、副業は「稼ぐ」こととセットという形で相次いで記事化されるようになった。完全に転職してしまうことは、現状よりも収入が下がったり時間の余裕がなくなったりするリスクがあるが、副業ならばリスクを回避しつつ「好き」を仕事にすることへの第一歩にもなりうるだろうし、収入面でもプラスになるならそのメリットも大きいだろう。副業が取り上げられるようになったのはそのような想定があるからだと考えられる。

2016年3月号には「“好き”を“仕事”にする前に見極める「パラレルキャリア」という働き方」という記事が掲載されているが(pp.54-57)、記事の冒頭に置かれたマンガでは、残業続きの27歳のOLケイコが「ホントは今の仕事とは全然違う、ネイリストにガラリと転職したいけど…いきなり転職するのは怖いなあ…」とつぶやくと、男性の先輩が現れて「生活を維持するために本業をしつつもう一つのキャリアで自分のやりたいことを試してみるというスタイル」として「パラレルキャリア」というあり方を紹介している。その先輩はさらに、「今の会社や仕事に頼り切るのではなく、別の選択肢を持っていると、結婚や出産などライフスタイルの変化がある女性にとっても保険にもなるんじゃないかな」と語っている(以上p.54)。この記事自体も「転身」「転職」未満のあり方を示すものであるが、「保険」という表現にリスクへの考慮の必要性が表現されている。なお2013年9月号にも、よりはっきりと「将来の保険になる「好き」を「仕事」にする働き方」(p.58)という表現がみられる。

「好き」を仕事にすることは、やりたい仕事だから・憧れの仕事だからめざされていたが、そしてそのことが変わってしまったわけではないが、2010年以降の時期にはただそれだけで追求することは難しいものになっている。さまざまなリスクを考慮して慎重に選択がなされるべきという考えのもとで、追求する「好き」の仕事自体が「保険」にもなるという視点からとらえられるようになってきているのである。

8. 2010～2016年(3) ——年齢の変化

2001～2008年の分析において、特に2006年以降に「25歳」という年齢が登場するようになることを指摘した。2010年以降の『ケイコとマナブ』の「好き」を仕事にする事の特集

号でも年齢が登場することがあるが、その年齢はさらに上がっていくことになる。

例えば、2010年9月号では「30代以降の“幸せ度”が変わる！「好き」を「仕事」にする方法」(p.15)として30代以降も働けるような「一生モノ仕事」が語られており、20代の読者を想定していると考えられるが、30代以降のことを展望する立場ということ考えると、おそらく特に想定されているのは25歳よりも上の、20代後半の女性たちであろう。実際これ以降の号でも、「20代後半から・未経験から「好き」を「仕事」にする方法」(2011年9月号, pp.30-31)、「20代後半からでも大丈夫「好き」が「仕事」になる 未経験から始めるHAPPY転身ガイド」(2012年3月号, pp.24-27)では「20代後半」となっている。具体的に年齢を記している例では、まず「27歳」が登場し(「27歳から「好き」を「仕事」に変える」(2011年3月号, pp.22-27)、「「好き」を「仕事」にする方法 27歳からのスタートBOOK」(2013年3月号, pp.42-51))、続けて「28歳」が登場する(「28歳からのストレスフリーで働ける「好き」を「仕事」にする選択」2014年3月号, p.48)。さらにその後には、「30代女子、これを最後の転職にしたい オンナがずっと恋しくなる仕事」(2015年3月号, pp.42-43)として、明確に30代の読者を想定したものが登場するに至る。将来「好き」を仕事にすることを考えている(つまり、まだその決断をしていない)女性たちは、この時期には確実に30代まで含むものになっているのである。

表4で示した平均初婚年齢をみると、2011年に29.0歳に達した女性の平均初婚年齢は、2014年に29.4歳に達してからはおおむね横ばい状態が続いている。平均がほぼ30歳ということは、実際の結婚年齢が30代であることはもはやまったく珍しくないことになったということでもある。結婚が30歳代での経験になりつつある中で、「好き」を仕事にするという選択も30歳代以降の経験になっている可能性がある。実際、引用した2015年3月号の言葉では「30代女子、これを最後の転職にしたい」とあり、「最後の転職」ということはこれまでに既に1度ないしは複数回の転職経験を経ているということでもある。「25歳から目指せる人気のお仕事」(『好きを仕事にする本』2006年12月刊行号)の頃から約10年を経て、「好き」を仕事にするという選択はより上の年齢でするものになりつつあり、そうであるがゆえにより慎重に、より決意をもって選択するものになっているのかもしれない。

30代の読者も想定されるようになる中で、そして結婚が「30歳代での経験」になりつつあり30代の未婚の女性も少なくない中で、望むかどうかによらず、このまま結婚しない人生を送る可能性も考えることもあるだろう¹²。そうした読者の存在を想定して、2015年9月号には「もし“一人”で生きていくことになったら何にいくらかかる？」という記事も掲載されている(pp.72-75)。この号は上で例示した、「20代女子の平均年収より稼げる「好き」を仕事にして年収350万円以上稼げる5つの方法」というフレーズが掲載されたのと同じ号であり、将来の結婚を必ずしも前提としない人生を送る可能性を考えたとき、「好き」を仕事にすることはやはりある程度の年収の確保と切り離せないことがこの例からもわかる。

9. おわりに——「全部手に入れたい！」ということ

以上のように、2010～2016年の『ケイコとマナブ』の「「好き」を仕事にする」ことを特

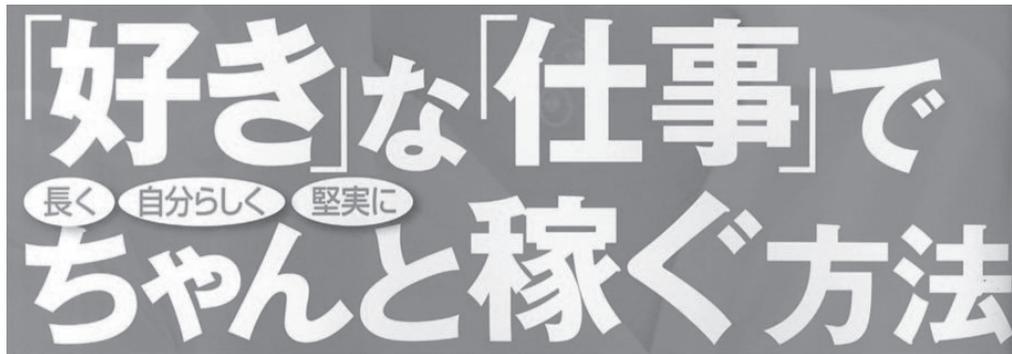
¹² 上述したように、出生動向基本調査の「予定ライフコース」の調査結果でも非婚就業コースの割合が年々増加し、2015年には2割を超えるほどにまでなっている(表3)。

集テーマとする号には、それまでの『好きを仕事にする本』の諸特徴に加えて、収入の重視・転職未満のあり方への言及・登場する年齢の上昇といった点が確認できる。「好き」を仕事にすることは、私らしさや憧れだけで語れるものではなく、さまざまな制約や条件をクリアできる可能性を現実的に吟味することなしには語りにくいものになったのである。このことは、別稿（久木元 2010）で論じた、「やりたいこと」が現状の継続／打開という文脈で現実的な検討を伴うものになったということと響きあうものだといえよう。

『ケイコとマナブ』での最初の特集号であった2010年3月号を改めて振り返ると、表紙に記された特集タイトルの「『好き』を『仕事』に変える方法」には、「やりがい・お金・時間…全部手に入りたい！」という言葉が付されていることも注目される。「好きなことを仕事にできさえすれば、収入などの他の部分が望ましくなくても受け入れる」というわけではなく、「全部手に入りたい」のである。やりがいやお金が得られることも時間の余裕もすべて重要であり必要であるということが、このフレーズには込められている。

したがって、「好き」を仕事にすることは単独で求められるのではなく、様々な付加条件とセットで語られることになる。そのことを明確に示す例が、2014年9月号の表紙である（図1）。そこでは、「『好き』な『仕事』でちゃんと稼ぐ方法」と大きく記されていて、「稼ぐ」（しかも「ちゃんと稼ぐ」）が加わっている。しかもそれだけでなく、さらに小さな字で「長く」「自分らしく」「堅実に」という言葉が「ちゃんと」の上に重ねられている。すべて重要で譲れない条件であるからこそ、これだけ盛り込まれる必要があるのである。

図1 『ケイコとマナブ』2014年9月号表紙（一部）



久木元（2003）で検討した1999年のフリーターたちの語りにおいて「やりたいこと」が優先的な地位を有していたことと比べると、ここで「やりたい仕事」ないし「好きを仕事にすること」は、求められる複数の条件のうちの一つという位置づけになっているともいえる。ただし、だからといって「好きを仕事にすること」の重要性が低下したというわけではない。むしろその重要性が確固としたものになったからこそ、ことさらに強調されなくなったともいえるのではないだろうか。2010年3月号は『ケイコとマナブ』の20周年の号でもあったため、巻頭に「20年の歴史を振り返る ザ・おケイコダイジェスト」という記事が掲載されている（pp.30-33）。その中の、1998年の『好きを仕事にする本』の創刊にふれた部分で、「今では当たり前前の「好きを仕事にする」という意識が広まり始めたのはまさにここから」と記されている（p.31）。「今では当たり前」と述べられているように、「好きを仕事にする」といった自己と仕事の連関を重視することは「当たり前」とされるようになったのである。「好きを仕事に

する」ことは、それだけを単独で追求するのは説得的たりえないとしても、ある程度は当然満たされるべき条件という位置づけは確立しているのではないだろうか。

別稿（久木元 2011）では、若者たちの語りの分析をふまえて以下のように述べた。すなわち、長く続く、リスク含みの未決定な状況の中で、事態を「打開」したいのに簡単にはそうもいかないような毎日をどう生き延びるか、別の言い方をすれば、好むと好まざるとにかかわらず完璧とはいえない現状が継続するという事態を生きることを、どのようにして有意義な経験にしていくかということこそが、現在の若者たちにとっての課題なのではないだろうか——と。その中で「好きを仕事にすること」はやはり大きな意味をもつ重要な要素であることに変わりはない。さまざまな条件の吟味は不可欠ではあるが、そのこととセットであれば、「好きを仕事にすること」という自己と仕事の連関のあり方は、日常を有意義化し日々を生き延びることにつながるものだといえるだろう。実際、一見するとたくさんの条件が求められているようにみえるかもしれないが、現在の若者たちが置かれた状況では、「好きな仕事」どころか「稼ぐ」ことも、また「長く」「自分らしく」「堅実に」といったことのそれぞれも不確定になりつつあるともいえ、それらを確保するにはあえてすべてを言明する必要があるということも指摘できるだろう。

働き続けて生活を維持することも、「好き」という意味を持たせることも、それ以外のこともすべてが必要なのである。全部手に入れてこそ、はじめて持続可能な働き方として像を結ぶようになる——それが、雑誌の変遷から浮かび上がる現在の女性たちの視界なのではないだろうか¹³。

文献

- 鶴飼洋一郎, 2007, 「企業が煽る「やりたいこと」——就職活動における自己分析の検討から」『年報人間科学』28: 79-98.
- 久木元真吾, 2003, 「「やりたいこと」という論理——フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』48(2): 73-89.
- 久木元真吾, 2010, 「「やりたいこと」の現在」小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在労働』日本図書センター, 117-148.
- 久木元真吾, 2011, 「不安の中の若者と仕事」『日本労働研究雑誌』612: 16-28.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 各年, 「出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」(https://www.ipss.go.jp/site-ad/index_Japanese/shusho-index.html 2023年9月25日確認).
- 下村英雄, 2002, 「フリーターの職業意識とその形成過程——『やりたいこと』志向の虚実」小杉礼子編『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構, 75-99.
- 妹尾麻美, 2015, 「新規大卒就職活動において『やりたいこと』は内定取得に必要なか?」『ソシオロジ』182: 39-55.

¹³ 日本からフィンランドに移住した社会学者の朴沙羅は、子育てについて新しい勤務先の同僚と話す中で、フィンランドで女性がいかに強く育てられるかという話題から、その同僚が次のような言葉を語ったと記している（朴 2021: 24）。それは、「私たち女性は、すべてを手に入れたいのです。尊厳、お金、時間の余裕、安定した仕事、欲しい人は配偶者と家庭、それから買えるお値段の家もね。共に手に入れましょう!」というものである。文脈の相違点はいくつかもあるかもしれないが、ここに「すべてを手に入れたい」という思いが現代社会において日本社会だけにとどまらない一定の普遍性をもつ可能性を見出せるかもしれない。

妹尾麻美, 2023, 『就活の社会学——大学生と「やりたいこと」』 晃洋書房.

寺崎里水, 2006, 「「好き」を入り口にするキャリア教育の限界——子どものやりたい「しごと」をめぐって」
『年報社会学論集』 19: 95-106.

日本労働研究機構, 2000, 『フリーターの意識と実態』 日本労働研究機構.

朴沙羅, 2021, 『ヘルシンキ 生活の練習』 筑摩書房.

山口泰史, 2012, 「非正規雇用者とやりたいこと志向の関連についての検討——やりたいこと志向の継続
と変化に着目して」東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリー
ズ, No.60.

Doing What You Love as a Job: An Analysis of a Japanese Career Magazine

KUKIMOTO Shingo

Abstract

This paper examines how the importance of what one loves when choosing a job has been discussed and positioned over the past 20 years, and how this positioning has changed over the years, analyzing a Japanese career magazine called *Doing What You Love as a Job*.

When the magazine was first published in 1988, “doing what you love as a job” was depicted as just a change to a job that one had longed for. Since 2001, however, the emphasis shifted to “what makes you unique.” From the late 2000s onward, emphasis was added on being able to keep one’s job and having sufficient income. Over the past 20 years, “doing what you love” has moved from being the most important factor in choosing a job to being one of the important conditions as well as other factors.

However, “doing what you love as a job” has not been reduced in importance but has gained the status of an indispensable factor. “Doing what you love” will be a realistic option when the multiple conditions on jobs are satisfied.

Keywords: “what you love,” *Doing What You Love as a Job*